

## &lt;編集部にて&gt;の記

- W: 待って、マイアー君、ここに残ってちょうだい！
- M: ああ、こんにちはヴェルナー編集長。いったいどうしたんですか？
- W: どこへ行くつもりなの？
- M: ちょうどお昼休みにしようと思っただけのところなんですけど。
- W: それはだめよ！
- M: どういうことですか、それはだめって？
- W: そうね、言い忘れてたけど、ラヴパレードについて、あなたに緊急ルポルタージュを書いてもらわなきゃならないの。
- W: さて、どんなことがわかったかしら？
- M: 一番最近のラヴパレード2006年は、夏の7月15日に行われました。でも、どういうわけか、一番最初のラヴパレードがいつ開催されたのか、探り当てることができなかつたんです。でもとにかくもう15年以上前から開かれてはいます。
- W: ああ、時が過ぎるのははやいものね…。マイアー君、ラヴパレードは1989年から開催されているの。ベルリンの壁が崩壊する4か月前。それはよく知られていることよ…。
- M: そうなんです。で、ラヴパレードは当初、「愛」「寛容」そして「国と国が相互に敬意を抱き、理解すること」をスローガンにした催しだったんです。
- W: でもそれがどうして今日のようにな形になったの？
- M: ええ、そんなに詳しいことは短期間では調べられなかつたんですけど。とにかく始まりは、やはり90年代初めにテクノミュージックの人氣が上昇してきたことと関係しています。
- W: 政治的な背景については、何かあるのかしら？
- M: そう尋ねられると、それほどないという答えになります。90年代の若者世代は、明らかに非政治的ですからね。ラヴパレードは当初から大衆的な催しで、いつも100万にもなろうかという人々をベルリンに惹きつけてきました。根っからのテクノファンの中にさえ、このお祭りがますます商業化していくことに苦言を呈する人たちも出てきたんです。2004年と2005年にはラヴパレードが開催されず、もうこれで終わりたいと思われていました。でも2006年に、電子音楽の国際的な

催し物としてよみがえったんです。

## &lt;雑誌記事&gt;の記

## ラヴパレード

すでに17年前から、毎年7月になると、世界的に有名なラヴパレードが開催され、何千というファンをベルリンへと引き寄せてきました。2003年まではテクノミュージックがその主役でした。テクノは90年代を代表する音楽スタイルのひとつで、とりわけドイツで形づくられました。ここではさまざまなシンセサイザーの音が、ひとりのDJ——以前はディスクジョッキーと言った——によって、歌声を伴わず、速いビートでミックスされ、変奏されます。多くのテクノミュージシャンは、ドイツのグループ「クラフトヴェルク」をテクノの祖と見なしていますが、このグループはすでに80年代の初めに、シンセサイザーとコンピュータを使って音楽を作り、テクノのトレンドを先取りしていたのです。2年の休止期間があり、その間ラヴパレードはすでに死んだと宣言されたのですが、国際電子音楽という新しい音楽コンセプトのもとで、2006年以降再び開催されることになりました。

見積もりによれば、おそらく世界で最大のこのテクノノパーティーに、毎年およそ100万もの人々が参加するということです。熱狂的なテクノファンは、ドイツのあらゆる地域からやってくるだけではありません。この巨大パーティーをともに楽しむと、近隣諸国からもたくさんの人々が遠い道のをやってくるのです。その上で選り抜きのダンスサーターたちが暴れ回り、観衆を鼓舞している、たくさんの車を伴った長い行列が、町を貫いて移動し、戦勝記念塔のところで終わります。しかしながらストリートパレードのあと、パーティーはさらに続きます。参加者たちは、町に教え切れないほどあるダンスクラブへと分散し、そこで本物のテクノファンたちは、一晩中踊り続けるのです。このラヴパレードをめぐっては、当初から議論がありました。とりわけ熱狂的なテクノファンがあとに残っていたゴミの山が問題となったのです。それは環境政策的な理由からだけでなく、そのゴミを市の負担で処理しなければならぬことによるものでもありました。さらに、繰り返し起こる合成麻薬の問題もあります。これは少なからぬテクノファンによって使用されるのですが、もちろん禁止されています。

(トーマス・マイアー)